

資料

公認 5km のロードランニングイベントを多数開催することを可能とした  
米国陸上競技連盟 (USATF) の取り組み

Why the USA Track & Field (USATF) is Succeeding  
in Holding Numerous Certified 5km Road Running Events

畔蒜洋平, 平田竹男  
早稲田大学スポーツ科学学術院

Yohei Abiru, Takeo Hirata  
Faculty of Sport Sciences, Waseda University

Key words: USA Track & Field, Running, Certified System

【抄録】

本研究は、米国の公認ロードランニングイベントにおける 5km の完走者数がフルマラソンの完走者数を上回ることを問題意識に、米国陸上競技連盟(以下、USATF)の公認競技会に対する取り組みを調査することを目的とした。USATF 公認の 5km ロードランニングイベント(以下、公認 5km)の開催数と特徴を明らかにするため、種目別の公認コース数の調査と、米国の 50 の州のうち最も公認 5km の開催数が多いニューヨーク州と、公認 5km のコース数が多い上位 5 大会の開催目的を調査し、大会の特徴ごとに開催数の調査を行った。その結果、公認 5km のコースは 8,451 コースあり、これは全体の 56.2% を占めており、フルマラソンの約 10 倍であった。また、ニューヨーク州の公認 5km の大会 708 大会のうち「Championship」の大会が 2 大会であり、残り 706 大会は「Non-Championship」の大会であった。その中でも、チャリティを目的とした大会が 384 大会、54.2% と過半数を占めている状況であった。米国の公認 5km の完走者が多い要因として、USATF の公認 5km の大会の開催数が多いこと、またランニング愛好者が多様な趣向や価値観をもとに参加できる受け皿として公認 5km が機能していることが要因として考えられた。さらに、USATF の制度的要因として公認制度はコース計測においては正確性を保証するために厳密に対応する一方で、ルール等の大会の運用面においては楽しさや多様性も尊重する柔軟性が見て取れることにも要因があることが考えられた。

【Abstract】

This study was initiated in response to the observed phenomenon in the U.S., where the number of finishers in certified 5km road running events surpass that of full marathons. The aim was to elucidate the approach taken by the USA Track & Field (USATF) towards their certified races.

We began by analyzing the number of certified courses by distance across the United States, focusing subsequently on New York, which hosts the highest number of certified 5km events. We also delved into the top five competitions with the most certified 5km courses and analyzed the number of certified courses based on event types. The findings revealed that there were 8,451 certified 5km courses in the U.S., accounting for 56.2% of the total. This is approximately ten times the number of full marathons. In New York alone, out of the 708 certified 5km events, only two were classified as "Championship" events, while the vast majority (706) were "Non-Championship" events. Notably, charity-based events constituted a significant portion, with 384 races or 54.2% of the total.

A crucial reason for the high number of finishers in the U.S. certified 5km races is the sheer volume of these events organized by USATF. Additionally, these events cater to the diverse preferences and values of recreational runners. Another contributing factor is the flexibility within USATF's certification system. While it ensures accuracy in course measurement, it also values enjoyment and diversity in race operations.

スポーツ科学研究, 20, 159-169, 2023 年, 受付日:2023 年 7 月 20 日, 受理日:2023 年 11 月 16 日

連絡先: 畔蒜洋平 169-0051 東京都新宿区西早稲田1丁目6 早稲田大学 14 号館 941

abiru0316@gmail.com

## I. 緒言

### 1 背景

世界 6 大マラソンの中で、米国はボストンマラソン、シカゴマラソン、ニューヨークシティマラソンの 3 大会を主催しており、数万人規模のロードランニングイベント(以下、ランニングイベントとする)が各地で開催されるフルマラソン大国として知られている。一方で、世界陸上競技連盟(以下、WA)の報告「The State of Running 2019」によれば、米国において公認競技会(以下、公認大会)の 5km 種目(以下、公認 5km)の完走者数がフルマラソンの完走者数を上回る傾向がある。このことから、米国では公認 5km がフルマラソン以上に人気を集めていることが示唆される。

一方、日本では日本陸上競技連盟(以下、日本陸連)が 2016 年に「競技スポーツとしての陸上競技」とは別に「健康のため、あるいは楽しみのためのスポーツとしての陸上競技」という位置づけの「ウェルネス陸上」の推進を発表している。日本陸連によると、ウェルネス陸上の一環として、公認大会の制度を活用し、公認大会の数を増やして大会主催者との連携を深める取り組みが進められているが、日本全体で開催される大小約 3,000 大会のうち、公認大会は約 200 大会に留まっているという課題が示されている。「全日本マラソンランキング」に掲載されている 2018 年 4 月 1 日から 2019 年 3 月 31 日までに開催されたフルマラソン 80 大会のうち 78 大会が公認大会となっている一方で、5km の公認大会に関してはわずか 1 大会のみの状況であり、フルマラソン以外の種目の公認大会化が課題であることが考えられる。(陸上ルールブック, 2019)。

米国陸上競技連盟(以下、USATF)との比較を行うと、公認 5km の大会環境が大きく異なっている。この違いから、何故 USATF は公認 5km を数多く開催することができるのか、という点が本研究の問題意識である。従って、本研究の目的は、米国での公認 5km のランニングイベントを多数開催することを可能としている USATF の取り組みについて明らかにすることである。

### 2 先行研究

本研究の問題意識及び目的に対する先行研究として、ランニング愛好者のランニング活動(Recreational Running)に関する研究、ランニングイベントに関する研究、そしてランニングに関する制度や政策に関する研究のレビューを行った。

まず、ランニング愛好者によるランニング活動に関する研究は、主にランニング活動の実実施動機や継続要因に関する研究が 1980 年代から 1990 年代にかけて積極的に行われていた。Carmack and Martens (1979)が 250 人の男性ランナーと 65 人の女性ランナーに対して、ランニングに関する態度や効果などを尋ねるアンケート調査を行い、ランニング中のランニングへのコミットメント尺度を開発・検証し、ランニングの活動時間の長さやランニングへの依存感などがコミットメントを予測する要因であることが明らかとなった。Johnsgard (1985)は、ランニングの継続には、内発的な動機づけと外発的な動機づけの両方を反映されており、内発的な動機づけが強いランナーの方が、よりコミットメントが高いことを示した。Okwumabua et al. (1987)は、40 歳以上から 70 歳までのマスターズのランニング愛好者に焦点を当

て、ランニングへの動機づけは内発的であり、自己実現や楽しさが主な理由である等の認知的な態度を明らかにした。近年では Hitchings et al. (2016)が室内と屋外でのランニング活動の効果の違いや、Evans and McLaren(2016)がランニンググループに所属することによる自己認識や動機づけへの影響について、Qviström et al.(2020)がランニング活動の時間帯による違い等といった、より細分化されたランニング愛好者の実施動機や継続要因の調査が行われる傾向にあった。一方、日本国内におけるランニング愛好者の実施動機や継続要因に関する研究は、徳永ら(1980)が、ランニング実施に対する Fishbein の行動予測式の適用を試みた研究や、備前ら(2015)が、都市型市民マラソン大会に参加するランナーが日常生活で直面する制約と、ランニング活動の継続性との関係性に関する調査、齊藤・中村(2018)が、ランニング愛好者が抱える3つの心理的課題である「走る目的」「走り方」「走ることのメリット」が、ランナーの意識や行動にどのように影響するかの調査が行われているが、主に大友ら(1994, 1995)が高齢者の運動動機構成因子を調査することや高齢者用運動動機構成尺度の開発を試みたものや、堀口・大川(2016)が老年期の自律性の要因研究の中で運動の実実施動機を問う調査、中野(2020)が高齢者のランニング活動と QOL に関する考察といった高齢者に特化した研究が積極的に行われている状況であった。

次に、ランニングイベントに関する研究として、主にスポーツツーリズムの領域で研究が行われている。大会の満足度や、再来訪要因に関する研究として、松本・野川(1991)がホノルルマラソン完走者を対象に、大会に対する満足度や満足要因を測定する項目が含まれており、レース日程、参加費、マラソンコース、ボランティアの対応、参加賞、運営全体などの6つの要因について評価を行った結果、日本人完走者のホノルルマラソン全体に対する満足度は非常に高く、特にボランティアの対応に対する満足度が最も高かったことや、大会に対する満足度とホノルルマラソン参加回数やフルマラソン経験との関連はほとんど認められなかったことが報告された。Jerome

et.al(2009)によって、2007年のホノルルマラソンにホノルル市に州税として370万ドルを生み出し、ホノルル市に1億880万ドルの経済的な影響を与えたことを示したことに加え、日本人参加者は英語圏参加者よりも平均的に滞在期間が長く、宿泊費や食事費などの消費額が高いことが示された。西尾ら(2013)は、ホノルルマラソンに参加する日本人ランナーを対象にランナーとしての動機と観光客としての動機をそれぞれ5つの因子に分類した結果、再訪意図に影響を与えた因子がそれぞれの動機の因子から確認がされたため、大会主催者は、ランナーと観光客の両方の動機を満たすようなサービスや情報提供が必要であることが示された。Wicker et.al(2012)は、ドイツの3つのマラソンイベントから、外国人の方がドイツ人よりも消費額が多く、マラソンへの満足度が開催都市への再訪意図に影響していることを示した。また、山口ら(2011)は、NAHAマラソンに参加するランナーの参加動機とレジャー活動への参加に影響を与える内的な要因(Push 要因)と外的な要因(Pull 要因)の分析を沖縄県内からの参加者と県外からの参加者で比較を行った結果、県外参加者は県内参加者よりも Pull 要因(特に観光・文化体験)が高く、Push 要因(特に自己実現・自己表現)が低いことが明らかになった。また、参加動機の分析結果から、NAHAマラソンを県内参加者は挑戦の場、県外参加者はツーリズム型のイベントとして位置づけていることも報告された。江頭(2016)は2015年の小江戸川越ハーフマラソンで、スポーツツーリスト(24時間以上開催地に滞在する参加者)はわずか2.5%であったものの、スポーツエクスカージョニスト(滞在時間が24時間以内で宿泊を伴わない参加者)に比べ1人当たりの支出額が約1.75倍であったことを報告している。さらに、伊藤・藤森(2019)は、諏訪湖マラソン大会参加者を宿泊参加者と日帰り参加者、同伴者の有無によって比較した結果、観光動機に関する因子では、宿泊参加者は日帰り参加者よりも「観光体験」「地域文化体験」「飲食体験」の動機が高く、同伴者ありの参加者は同伴者なしの参加者よりも「社会的交流」「観光体験」「地域文化体験」の動機が高い結果となったことから、

同伴者の存在の重要性が示唆された。またランニングイベントではなく Track & Field のイベントに関して 2005 年に開催されたパンアメリカンジュニア陸上競技選手権大会を対象に行われた研究が行われていた。Snelgrove et al. (2008) は、地元住民、カジュアルな来場者、イベントを主目的とした来場者の 3 つのタイプに分けて参加動機について調査した結果、イベントを主目的とした来場者は、陸上競技のサブカルチャーへの同一化やファン動機が高い結果になった一方で、地元住民はカジュアルな来場者よりもレジャー動機が高いという結果が示された。また、Taks et al. (2009) は、大会に訪れた観客や選手関係者が、フローオン・ツーリズム(イベントの周辺で行われる観光活動)参加の程度が低かったという結果から、大会と開催地域のプロモーションも含めて行うことの必要性を提示した。

ランニング活動や、ランニングイベントを活用した制度や政策に関する研究については、岩谷ら(2012)は、日本陸連公認コースである 51 のフルマラソンを対象に、制限時間や参加者数などのデータから「A 型:伝統・競技型」、「B 型:行政・市民型」「C 型:大規模・市民型」「D 型:大規模・競技型」の4つに分類し、C 型の大会は、1980 年代、2000 年代に行政主導で新設されたツーリズムや地域活性を目的に開催される大会が多い、継続して開催していくためには、官民一体の運営の必要性が提示された。また、畔蒜ら(2020)が、公認大会が実質提供している4つの価値を大会主催者に提示した結果、いずれの価値に対しても積極的な回答が得られた一方で、公認取得に対する手続きに課題があることを示した。さらに、畔蒜ら(2021)は、フルマラソン完走者に対しても公認大会の価値の調査をしたところ、完走者の走力に関わらず大会主催者と同様の結果が得られた。

これらの研究からランニング活動に関する実施動機やランニングの効果検証、また大会への参加動機や経済効果といった研究は国内外で多数行われている状況であったが、ランニングを競技団体や行政をはじめとする公的機関の制度的、政策的な視点からの研究は十分には行われてい

ない状況であった。特に本研究の主眼とする USATF の取り組みに着目した研究は、パンアメリカンジュニア陸上競技選手権大会といった個別の大会を対象とした研究に留まっており、制度や施策を対象とした研究は行われていなかった。従って、本研究は従来の研究にはない視点で USATF の取り組みを研究対象とする萌芽的な位置づけと言える。

## II. 方法

### 1. USATF の公認大会の定義

USATF の公式 HP によると、公認大会の条件を定める日本陸連の公認競技会規定に該当する規定が確認されなかった。代わりに、「Event Sanctioning Program」と「Course Certification Program」という 2 つの認定プログラムが確認された(USATF, 2023)。「Event Sanctioning Program」は、ある大会が承認されると、USATF のロゴを使用してイベントを宣伝することや、USATF の物損保険等の保険を利用すること、USATF の公式ルールや安全基準に従って大会を運営すること等のメリットを受けることが可能であった。一方で、「Course Certification Program」は、認定を受けると大会の距離の正確性が保証され、完走者の記録が公認され、USATF のランキングに反映されることが可能であった。USATF では、記録を公認するための必須条件は「Course Certification Program」の認定を受けることであったことから、本研究では記録が公認される大会であるコースが公認されている大会を USATF の公認大会と定義して調査を行った。なお、本研究では大会をニューヨークシティマラソンのように固有のイベントを大会として用いるものとする。

### 2. USATF 公認 5km の大会の特徴

#### 1) データ抽出とクリーニング

USATF の公式 HP から 2023 年 5 月現在で有効な 22,417 の公認コースが抽出された。USATF から取得したコース情報には大会名が同じであるが年度の標記が異なるコース等の重複が見られたため、Microsoft Excel の「重複の削除」機能を用いてコース ID や大会名に基づく重複データを

検出し、さらにフィルタリング機能を利用して同一コースで標記が異なるコースの重複を目視で確認した上で、該当データを手動で消去し、データのクリーニングを行った結果、15,050 のコースが抽出された。

## 2) 距離別の大会数の把握

大会の特徴の把握としてまず、距離別に大会をまとめ、国際陸連が公認種目として定められている距離(5km, 10km, 15km, 20km, ハーフマラソン, 25km, 30km, マラソン, 50km, 100km) と, USATF が独自に認めている距離を「その他」として集計を行うことで、公認コース総数に占める 5km コースの認定状況について調査を行った。

## 3) 大会の開催趣旨の把握

次に各大会の開催趣旨についての調査を行った。15,050 全コースの大会の開催趣旨を把握することは現実的ではないため、米国の 50 の州の中で最も 5km のコース数が多いニューヨーク州と、5km の公認コース数が多い上位 5 大会をサンプルとした。このサンプルをもとに、大会の特徴を分類して開催趣旨を把握した。ただし、先行研究では大会の趣旨を分類するような研究や、また民間のエントリーサイト等においても行われていない状況であった。しかし、USATF は、「2022 USATF Competition Rules」において「Championship」と「Non-Championship」という基本的な分類を行っていたため、本研究では、この基本的な分類に基づき、岡村(2004)を参考に、コーディングとカテゴリー化とラベリングを行うことで、さらに詳細なサブカテゴリーを作成し、大会

の趣旨をより具体的に分類した。手順としては、インターネットから各大会の概要を取得し、記載事項からコードを抽出し、共通する言葉を共通の概念としてカテゴリー化しラベリングを行った。「Non- Championship」のなかには、研究開発支援のようなチャリティの大会や、仮装を楽しむような大会等が見られたことから、最上位のカテゴリーとして「Championship」と「Non- Championship」を設定し、「Non- Championship」内に、さらなるサブカテゴリーとして「啓発・チャリティ」「健康の維持増進」「ファンラン」「セレブレーション」の 4 つを設けた。最後にこれら分類に基づいて大会数の集計を行った。

## 4) 信頼性の検証

カテゴリー化、ラベリングの信頼性の検証として、第2著者及びランニング専門誌の有識者に初期のカテゴリー分類を提出し、フィードバックを受け取った。複数の意見を基にカテゴリーの統合や名称変更を行い、全員の合意が得られるまで再編成を繰り返した。

## III. 結果

### 1. USATF の距離別公認コース数

USATF の公認コース数は 15,050 コースあり、そのうち 56.2%にあたる 8,451 コースが 5km であり、距離別で最も多い結果となった。次に 10km が 1,817 コース、12.1%であり、ハーフが 1,687 コース、11.2%、マラソンが 864 コース 5.7%であった(表 1)。またその他のコースが 1,987 コースあり 5km に次いで多く 13.2%であった。

表 1 USATF の公認コース数(2023 年 5 月時点)

	距離(km)	5	10	15	20	ハーフ	25	30	マラソン	50	100	その他	合計
USATF	コース数	8,451	1,817	149	17	1,687	18	12	864	35	13	1,987	15,050
	割合	56.2%	12.1%	1.0%	0.1%	11.2%	0.1%	0.1%	5.7%	0.2%	0.1%	13.2%	

## 2. USATF 公認 5km の特徴

### 1) ニューヨーク州の公認 5km の特徴

ニューヨーク州は 5km の公認コースが 708 コース存在し、1つの大会で複数のコースが公認されている大会はなく、708 大会が公認大会として確認された。この全 708 大会の開催趣旨として、「啓発・チャリティ」を趣旨とするものが 384 大会、54.2%と最も多く、例えば「Ovarian Cancer 5 km」は癌の研究開発、患者の支援といった趣旨の大会が開催されていた(表 2)。次に、「健康の維持促進」が 246 大会、34.7%であり、女性の健康の

促進を趣旨とした「Freihofer's Run for Women 5K」のような大会が開催されていた。また、ゾンビの格好をした参加者が走る「Zombie 5K」のような「レジャー」が 42 大会、5.9%と続き、9.11 の追悼趣旨とした「Running to Remember 5K」のような「セレブレーション」の大会が、34 大会、4.8%であった。「競争」を趣旨とした大会は、最速を競う「Fastest 5K in the Hudson Valley」とニューヨークシティマラソンの前日に開催される「Abbott Dash to the Finish Line 5K」の 2 大会、0.3%であった。

表 2 ニューヨーク州の公認 5km の分類

大カテゴリー	カテゴリー	コード	大会数	割合	主な大会
Non-Championship	啓発・チャリティ	研究開発 環境保護 障害者支援 家庭内暴力 退役軍人支援 教育支援	384	54.2%	「Ovarian Cancer 5 km」癌の研究開発、患者の支援
	健康の維持促進	女性の健康 高齢者の健康 地域住民の健康	246	34.7%	「Freihofer's Run for Women 5K」女性の健康の促進
	レジャー	仮装 音楽 記念日 フェスティバル	42	5.9%	「Zombie 5K」ゾンビの格好をする仮装ラン
	セレブレーション	9.11 の追悼 故人の追悼	34	4.8%	「Running to Remember 5K」9.11 の追悼
Championship	競争	順位決定 エリート チャンピオン	2	0.3%	「Fastest 5K in the Hudson Valley」最速を競う

### 2) 公認 5km のコース数が多い上位5大会の特徴

次に 5km の公認コース数が多い上位5大会の特徴を表 3 に示した。「Race for the Cure」は、「Susan G. Komen for the Cure」という非営利団体が女性の健康の啓発を趣旨に開催しており、87 コースが公認されていた。次に、「CHICK-FIL-A 5K」は米国のフライドチキンチェーン店である

CHICK-FIL-A 社のサンドイッチがもらえる大会で、大会によって株式会社、非営利団体、ランニングクラブ等が主催をしており、54 コースが公認されていた。「Shamrock 5K」はセントパトリックデーに緑の服装をして参加する大会であり、「CHICK-FIL-A 5K」同様、大会によって主催者が異なっており、30 コースが公認されていた。「Rock N Roll 5K」は、音楽とランニングを楽しむことがコンセプトの

大会で Advance Publications 社が主催をしており 27 コースが公認されていた。「Hot Chocolate」は、ゴールするとチョコレートがもらえる大会であり、Ventures Endurance 社が主催をしており 23 コースが公認されていた。いずれの大会も競技性を

求める趣旨の大会ではなかったが、記録の計測は行われ、記録証や完走メダルが付与されていた。

表 3 公認コース数が多い上位5大会の特徴

大会名	概要	記録計測	種目	コース数	開催州数
Race for the Cure	女性の健康の啓発	あり	5K	87	33
			10K	9	9
CHICK-FIL-A	ゴールするとチックフィレイのサンドイッチがもらえる	あり	5K	54	12
			10K	27	9
Shamrock	セントパトリックデーに開催されるランニングイベント	あり	5K	30	22
			10K	6	6
Rock N Roll	音楽とランニングを楽しむことがコンセプトのランニングイベント	あり	5K	27	18
			10K	13	13
			ハーフ	28	21
			マラソン	12	12
Hot Chocolate	ゴールするとチョコレートがもらえるランニングイベント	あり	5K	23	17
			15K	20	19

#### IV. 考察

##### 1. USATF の公認 5km が支持される背景

USATF の公認コースにおいて 5km のコース数が 8,451 コース、全体の 56.2% を占めている状況であり、フルマラソンの 864 コースと比較すると、約 10 倍の大会数である。この差は、USATF の公認 5km の完走者数がフルマラソンの完走者数を上回る要因のひとつとして考えられる。その背景として、公認 5km はフルマラソンよりも距離や完走時間が短いことから、コースの認定や運営が容易であるため、各地での開催がしやすいことが考えられる。例えば「大阪マラソン 2019」の場合、経常費用は 14 億 7874 万円であり、運営費用の約 50% がコース調整等の大会運営費が 7 億 4,673 万円であり、フルマラソンの開催には交通規制や高い運営コストを伴う。この高額な運営コストを考慮すると、公認 5km の方が低コストでの開催が可能である点が、頻繁な開催の魅力と言

える。

次に、公認 5km の大会の特色を見ると、競技的な観点だけでなく、より多様な趣旨での開催が目立っている。特に「Race for the Cure」や「Hot Chocolate」など、社会的な意義を持つチャリティイベントや楽しみを追求した「Non-Championship」の大会が多数を占めている。このような趣旨の大会に参加するランナーは、必ずしも競技志向ではなく、ランニングそのものの楽しさや、大会が背負う社会的な使命に共感して参加していると推察される。この点から、USATF の公認 5km の大会は、ランニング愛好者が多様な趣向や価値観をもとに参加できる受け皿として機能していると言える。

米国の 5km の完走者がフルマラソンの完走者を上回るという現象は、「Non-Championship」大会の開催数が多いこと、ランニング愛好者が参加しやすい多様な趣旨の大会が開催されていること

が大きな要因であると解釈できる。

## 2. USATF の制度的特徴

畔蒜ら(2020)が指摘するように、日本陸連の「公認競技会規定」には、そもそも大会主催者が公認を取得する意義や効果が記載されていない状況である。対照的に USATF の「Course Certification Program」には、USATF の公認を取得する意義が明確に示されていた。具体的には、正確な距離の測定を通じて記録の正確性が担保されるという点を強調しており、さらにその計測方法は国際標準である WA の方法に準拠している。このような取り組みは、参加者や大会主催者が公認制度の意義や価値を理解し、それに基づいて行動するための明確な指針として機能している。畔蒜ら(2020)の調査にもあるように、我が国においても「距離の正確性」に関しては、どの大会主催者に対しても支持される価値であったことから、日本陸連において公認取得の価値として距離の正確性を明確に示すことは、公認大会を普及させる上で重要な視点であることが考えられる。

さらに、USATF のルールブックの中で、「Non-Championship」の記載があることも大きな特徴の一つと言える。これは、競技としての厳格なルールの下での大会だけでなく、よりカジュアルで楽しむことを主目的とした大会も、公認の範囲に含めることが可能となる。その結果、参加者のニーズの多様性を反映するとともに、より広範な層にランニングの魅力や参加の機会を提供することが可能となっていることが考えられる。例えば、号砲からフィニッシュラインの通過までの記録である「ガン(グロス)タイム」と、スタートラインを通過した時点からフィニッシュラインを通過した時点までの「ネットタイム」の2種類がある。WA は「ガン(グロス)タイム」のみを公認記録として認めており、日本陸連も WA に準拠する内容となっている。一方で、USATF は「Non-Championship」においては「ネットタイム」を活用することが認められていることで、個々の実力を正確に測ることができる環境が提供されている。

このように、USATF の取り組みは、コース計測においては正確性を保証するために厳密に対応

する一方で、ルール等の大会の運用面においては楽しさや多様性も尊重する柔軟性が見て取れる。こうした USATF の競技の公正性と参加者の多様なニーズを両立させるような視点や取り組みは、日本陸連が公認制度を、活用していく際の先進事例となり得るものである。

## 3. 公認 5km の普及の課題

USATF の公認 5km の特徴として、チャリティを趣旨とした大会が多い点が挙げられる。これらの大会は、生活困窮者の教育支援などの地域課題の解決を主目的としている。一方、宮本ら(2011)や二宮ら(2014)の研究が示すような経済波及効果を主眼とする大会は USATF 公認 5km からは確認されなかった。これにより、公認 5km の参加者は主に地域住民や、遠方からでも日帰り可能な参加者が中心となることが想定される。山口ら(2011)や江頭(2017)が示したように、地元住民や日帰りの参加者が主体の大会では、必ずしも高い経済効果は期待できないことが課題として挙げられる。しかし、備前ら(2016)の指摘するように、都市型市民マラソンの参加者にとって、自らの記録や達成感が動機の一つであることを考慮すると、公認 5km は、これらの要素を受け皿になり得る性質の大会である。ただし、フルマラソンで完走時間3時間を切る「サブスリー」や4時間を切る「サブフォー」のように目安となる目標の設定が公認 5km の場合難しく、公認 5km の大会自体の魅力付けを行う必要がある。つまり、USATF の取り組みを参考に我が国において公認 5km の制度的環境を整えることと同時に、大会主催者が公認 5km を開催するための意義や効果、ランニング愛好者に対する公認 5km の魅力付けといったアプローチも求められよう。本研究では、USATF の公認 5km の特徴を把握するに留まったが、今後、USATF の公認 5km の参加者に対する動機の調査や、大会主催者に対する大会の魅力付け等といった公認 5km の価値向上を視野に入れた調査が求められる。



## V. 結論

本研究は、USATF が公認 5km を数多く開催することを可能にした取り組みを明らかにすることを目的に、USATF の距離別の公認大会の開催数や、公認 5km の大会の開催趣旨に関する調査を行った。調査の結果、公認コースは 15,050 コース中、公認 5km が 8,451 コース(56.2%)を占めていること、そして特にニューヨーク州や上位 5 大会での公認 5km の多くが「Non-Championship」のチャリティ等を趣旨としたものであることが確認された。これらの結果から、米国の 5km の大会の完走者が多い要因として、USATF の公認 5km の大会の開催数が多いこと、またランニング愛好者が多様な趣向や価値観をもとに参加できる受け皿として公認 5km が機能していることが要因として考えられた。さらに、USATF の公認制度はコース計測においては正確性を保証するために厳密に対応する一方で、ルール等の大会の運用面においては楽しさや多様性も尊重する柔軟性が見て取れることにも制度的要因があることが考えられた。ただし、本研究は、あくまでも制度的な要因を示すに留まり、個別の大会の参加者の属性や、参加動機、公認大会に対する価値観やランナーの認識等、これらの観点からの先行研究はほとんどない状況であり、今後より詳細な調査が必要である。

## VI. 参考文献

- ・ 畔蒜洋平, 渡部慶子, 畠中靖浩, 大嶋康弘, 風間明, 早野忠昭, 尾縣貢. (2020). ロードレース主催者における日本陸連公認競技会の価値に対する認識. *スポーツ産業学研究*, 30(4), 395-399.
- ・ 畔蒜洋平, 渡部慶子, 畠中靖浩, 大嶋康弘, 風間明, 早野忠昭, 尾縣貢. (2021). フルマラソン完走経験者における日本陸連公認競技会の価値に対する認識. *スポーツ産業学研究*, 31(1), 77-82.
- ・ 備前嘉文, 二宮浩彰, 庄子博人. (2015). 都市型市民マラソン大会への参加における制約とランニング活動動向の関係: 個人内の制約と対人的制約からの検討. *生涯スポーツ学研究*, 12(2), 15-23.
- ・ Carmack, M. A., & Martens, R. (1979). Measuring commitment to running: A survey of runners' attitudes and mental states. *Journal of Sport Psychology*, 1, 24-42.
- ・ 江頭満正. (2016). スポーツツーリストとエクスカージャーニストの経済効果比較: 小江戸川越マラソンを事例に. *尚美学園大学総合政策研究紀要*, 27, 89-105.
- ・ Evans, E. B., & McLaren, C. (2016). Imagine running together: Preliminary experimental study of how running group membership impacts personal running identities. *EXERCISE PSYCHOLOGY*, 48(1).
- ・ Hitchings, R., & Latham, A. (2016). Indoor versus outdoor running: understanding how recreational exercise comes to inhabit environments through practitioner talk. *Transactions of the Institute of British Geographers*, 41(4).
- ・ 堀口康太, 大川一郎. (2018). 高齢者の社会的活動への動機づけと他者との関係性の関連: 活動内の仲間関係, 配偶者, 子供, 孫の 4 側面に着目した検討. *教育心理学研究*, 66(3), 185-198.
- ・ 伊藤央二, 藤森美月. (2019). 諏訪湖マラソン大会参加者のマラソン大会参加動機と観光動機に関する研究: 参加者の宿泊と同伴者の有無に着目して. *生涯スポーツ学研究*, 16(2), 1-11.
- ・ 岩谷雄介, 鈴木直樹, 原章展, 平田竹男. (2012). 国内市民マラソンの類型別発展策に関する研究. *スポーツ産業学研究*, 22(1), 63-70.
- ・ Jerome, A., Joseph, D. L., Samuel, S. K., & Todd, B. (2009). The Impact of Consumer Behavior and Service Perceptions of a Major Sport Tourism Event. *Asia Pacific Journal of Tourism Research*, 267-277.
- ・ Johnsgard, K. W. (1985). The motivation of the long distance runner: II. *Journal of Sports Medicine*, 25, 140-143.
- ・ 公益財団法人日本陸上競技連盟 HP「ロードレ

- ース大会検索」<https://www.jaaf.or.jp/roadrace-search/> (2023 年 5 月 25 日閲覧)
- ・公益財団法人日本陸上競技連盟 HP「競技運営委員会」  
<https://www.jaaf.or.jp/about/resist/technical/> (2023 年 5 月 25 日閲覧)
  - ・公益財団法人日本陸上競技連盟 HP「施設用器具委員会」  
<https://www.jaaf.or.jp/about/resist/shisetsu/> (2023 年 5 月 25 日閲覧)
  - ・公益財団法人日本陸上競技連盟 HP「ルール・ハンドブック」  
<https://www.jaaf.or.jp/about/rule/> (2023 年 5 月 25 日閲覧)
  - ・Marijke, T., Laurence, C., B. Christine, G., Stefan, K., & Scott, M. (2009). Factors Affecting Repeat Visitation and Flow-on Tourism as Sources of Event Strategy Sustainability. *Journal of Sport & Tourism*, 14(2-3), 121-142.
  - ・松本耕二, 野川春夫. (1991). ホノルルマラソン完走者の満足要因の分析—日本人完走者を対象として—. *レクリエーション研究*, 25, 38-39.
  - ・宮本勝浩, 郭進, 王秀芳. (2011). 大阪マラソンの経済波及効果. *現代社会と会計*, 5, 187-196.
  - ・中野隆之. (2020). 高齢者のジョギング・ランニング活動と QOL に関する一考察. *日本公衆衛生雑誌*, 67(3), 211-220.
  - ・二宮浩彰, 松永敬子, 長積仁. (2014). 都市型市民マラソンの参加者がもたらす経済波及効果の推計 京都マラソン 2012 ランナー調査に基づいた分析. *生涯スポーツ学研究*, 10(1-2), 31-40.
  - ・西尾建, 岡本純也, 石盛真徳. (2013). 参加型海外スポーツイベントにおけるアウトバンド・ツーリストの研究-ホノルルマラソン参加者の動機と制約要因について-. *スポーツ産業学研究*, 23(1), 75-88.
  - ・岡村純. (2004). 質的研究の看護学領域への展開: 社会調査方法論の視点から. *沖縄県立看護大学紀要*, 5, 3-15.
  - ・Okwumabua, T. M., Meyers, A. W., & Santille, L. (1987). A demographic and cognitive profile of master runners. *Journal of Sport Behavior*, 10, 212-220.
  - ・大友明彦, 渡辺京子, 山田紀代美, 鈴木みずえ, 江口清, & 土屋滋. (1994). 高齢者の運動動機構成因子の探索—高齢者用運動動機尺度の開発にむけて. *理学療法学*, 21, 218-225.
  - ・大友明彦, 渡辺京子, 山田紀代美, 鈴木みずえ, 江口清, & 土屋滋. (1995). 高齢者用運動動機尺度の妥当性と信頼性の検討. *理学療法学*, 22, 119-124.
  - ・大阪マラソン公式 HP「令和元年度 収支決算額」,  
<https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/11323/000000/R01kessan.pdf>, (2023 年 5 月 25 日閲覧)
  - ・Wicker, P., Hallmann, K., & Zhang, J. J. (2012). What is influencing consumer expenditure and intention to revisit? An investigation of marathon events. *Journal of Sport & Tourism*, 17, 165-182.
  - ・Qviström, M., Fridell, L., & Kärrholm, M. (2020). Differentiating the time-geography of recreational running. *Mobilities*, 15(4).
  - ・RUNNET「全日本マラソンランキング」  
<https://runnet.jp/project/ranking/2019/pdf/ranking2019.pdf>, (2023 年 5 月 25 日閲覧)
  - ・Snelgrove, R., Taks, M., Chalip, L., & Green, B. C. (2008). How Visitors and Locals at a Sport Event Differ in Motives and Identity. *Journal of Sport & Tourism*, 13(3), 165-180.
  - ・齊藤恵理称, 中村好男. (2018). ランナーの意識および行動と心理的課題との関連—ランニングの継続につながる要因の検討. *スポーツ産業学研究*, 28(4), 337-343.
  - ・徳永幹雄, 多々納秀雄, 橋本公雄, 金崎良三. (1980). スポーツ行動の予測因子としての行動意図・態度・信念に関する研究 (I): ランニング実施に対する Fishbein の行動予測式の適用. *体育学研究*, 25(3), 179-190.
  - ・USA Track & Field 公式 HP, "Overview and Differences of the USATF Event Sanctioning Program and Course Certification Program"  
<https://www.pausatf.org/wp-content/uploads/2014/07/SanctionOverview.pdf>

- f, (2023 年 5 月 25 日閲覧)
- ・ USA Track & Field 公式 HP. "Course Certification"  
<https://www.usatf.org/resources/course-certification>"[http://legacy.usatf.org/routes/search/index\\_advanced.asp](http://legacy.usatf.org/routes/search/index_advanced.asp) (2023 年 5 月 25 日閲覧)
- ・ USA Track & Field 公式 HP. "RULE BOOKS"  
<https://www.usatf.org/governance/rule-books>(2023 年 5 月 25 日閲覧)
- ・ 山口志郎, 佐々木朋子, 山口泰雄, 野川春夫. (2011). マラソンランナーの参加動機と Push-Pull 要因に関する研究: NAHA マラソンにおける県内・県外参加者に着目して. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 4(2), 57-67.